

# 方間舎楓京『俳藻塩草』翻刻 (1)

富田 康之

## はじめに

楓京の著作物、及び俳諧活動の概観については、既に拙稿「知多俳人方間舎楓京について」(『東海近世』第三号・平成二年五月)の中で述べた。『俳藻塩草』については、そこでも書誌と簡単な内容を記しておいた。しかし本書は、尾張俳諧史の上から見ても、重要な資料的価値を持つものと判断される。特に有力俳人との連句資料は、その数多さから見ても貴重なものであり、また、地方俳人の活動の有り方を知る上でも格好のものである。よって本稿では、『俳藻塩草』の全文を翻刻、紹介しようと思う。尚、内容については前掲書を参照して頂きたいが、書誌についてはここにも記した方が便利であると思われるので、重複を厭わず再録する。

所蔵・愛知県立大学附属図書館。表紙は共紙(全冊仮綴本)。縦二十三・八糎×横十五・八糎。全二十冊。外題・『俳藻塩草』。内題・『藻塩草』。第一・六十四丁、第二・四十六丁、第三・四十丁、第四・三十八丁、第五・六十丁、第六・五十七丁、第七・三十四丁、第八・三十八丁、第九・三十八丁、第十・三十八丁、第十一・三十八丁、第十二・三十七丁、第十三・三十七丁(墨付三十一丁)、第十四・三十六丁、第十五・四十六丁、第十六・三十七丁、第十七

・四十丁、第十八・三十八丁、第十九・三十八丁、第二十・三十六丁(墨付二十二丁)。写年次・第七冊「明和二乙酉秋九月日」、第八冊「明和二乙酉槐九月」、第九冊「明和三丙戌冬陽月中旬」、第十冊「明和四丁亥秋九月日」、第十一冊「明和四丁亥冬臘月十三日」、第十二冊「明和五年戊子季秋」、第十四冊「明和七庚寅季夏」、第十六冊「明和八辛卯八月」、第十七冊「明和九辰十月七日」、第十八冊「安永二癸巳九月中旬」、第十九冊「安永三午夏五月朔日」。第二十冊は未完。

## 凡例

- 一 漢字、仮名の区別は底本のままとした。
- 一 原則として漢字のうち、異体文字の類は通行の文字に改めた。
- 一 誤写と思われるものは、該当文字の下に正しいと思われる文字を( )に入れて記した。

俳藻塩草 一 (表紙)

市中林 (見返し)

藻塩草

壹

座右銘

人の短を云ことなかれ  
己か長を説ことなかれ

物いへは唇さむし秋の風

芭蕉翁 (1・オ)

廿日あまりの月かすかに山の根きわいと暗く馬上に鞭をたれて落ぬへきことあまたゝひなりけらし数里いまた鶏鳴ならず杜牧か早行の残夢小夜の中山にして忽驚く

馬に寝て残夢月遠し茶の煙

芭蕉 (1・ウ)

三ヶ月の空にさいたは何の花

東華房

福兼や奢らぬ年のはいり口

五条房三逕

冬月の一輪さいて芳野山

白花房辨三 (2・オ)

五ヶ日の望みは高鳳亭の夜話に和して生花の物数寄を観す

松の膝崩す出あいや梅柳

廬元坊

歳尾

華紅葉ちらし足らてや年の鐘

反喬舎巴雀 (2・ウ)

哥仙一卷

木柁のあそひ中間そ百合の花

廬元坊里紅

窓の螢にちかき文机

巴雀

山風の音のみ里に吹かねて

巴静

旅をせふならこんな時とて

三逕

つはくらと月は柳にとり残す

雀

門に躍の留主淋しかる

紅 (3・オ)

一樽も起てはおらぬ肌寒く

逕

ふねの嫌はしれる躰卷

静

明神の灯かちら／＼と松の中  
今のは狸臭い小坊主

紅 雀

御普請のこつは拾ヒに女小共

静

腮をかゝえるはやり哥なり

逕

地藏には盆の匂ひの残り居て

雀

西瓜の客を掾へ掃出す

紅 (3・ウ)

月の影宵しや／＼と思ふたに

逕

棒ついて来て覗く小便

静

男犬さへはいらぬ華の下屋鋪

紅

中嶋の茶を摘にゆく舟

雀

笠させて婆々の弥生を誉そやし

静

葺師の槌も昼休ミ時

逕

朔日の佛供は淋しき位牌堂

雀

山はいちににそれる手習

紅 (4・オ)

息才な上にも灸はくさひなり

逕

謗かきいて漸々立れる

静

献立もしまらぬ宵の濱便り

紅

二階の柴を下すかけ聲

雀

一しきり丸雪にもなる神送り

静

紅葉ちり飛みそさゝあとふ

逕

あたし野、段書仕舞月の前

雀

都の秋の莖菜恋しき

紅 (4・ウ)

名残

伯父房はいまたに菊をすきやるやら

逕

眠りをかくしかねる輸入

静

呼声の木玉にひゝく蔵の間

紅

丸めた雪の置所なき

雀

朝起も朝寝も華の三ケ日  
家もち子もち宿に若餅

静 逕 (5・オ)

獨吟

白花房辨三

寒聲や諷はぬ者も付て行

餅屋を問へは夜の煤掃

相井戸へ落た釣瓶を取かねて

竹しよんほりと風もしつまる

暮の月哥人は眠る隙かない

手もさゝすある柿に小刀

金出さぬ此佗言は肌寒く

泰平の代に後家の偏屈

摺鉢に四角な蓋も取あへず

櫓の花のそこらうち散る

寺一字布留の都に住あれて

まだ居かと治郎見にゆく

雨雲の嘘月にはけ風に元

狐生捕る栗栖野、萩

背にのひて智恵の渡らぬ相撲取

着せて見たさに母の縫物

念佛に花咲壬生も千本も

そはくくと飛ふつはくらの道

進物の雛か中間つれて来る

茶漬に鱈おかしなからも

赤壁にむかし牡丹の花さかり

取立られて醫者帳に載ル

此ちの気もしらて女房に成たかり

方問舎楓京『鹽藻塩草』翻刻 (1)

(5・ウ)

名残

注文を見やて飛脚に吞こませ  
借シ下されの羽織よろこふ

川風の日は照ながら涼しくて

両輪ともに葺仕舞けり

富限者の光りに華もかしこまり

御師の春たつ太々の膳 (7・ウ)

としく元日を違へす咲草あり其名は牡丹の富貴にすくれ花の姿

は菊の隠逸にも似かよふ物から我かくれ家の翫ともなせるならし

きせ綿の手いれやとしの福寿草 黄鸝主人 (8・オ)

花鳥のましはりに仮日あれば月雪の扉に気を養ふ夕もありて何国

も仮の旅寝ながら故郷の冬籠もわすれかたく師老も十日過る頃花洛

より茶話屈に帰りて

羽箒に古巢の煤もまはりあひ 廬元坊 (8・ウ)

短歌行

餅のあるうちは降る也春の雨

軒は柳やさくらしたゝる

気のやすひ公家侍に出替りて

船に一夜の旅をしてみる

山風吹はらしたる月の暈

(四七)

野中の秋の隣ほしさよ

静 (9・オ)

母ひとり養ふほとは田も作り

雀

飛脚も膽をつふす横車

見

葺籠る雨に夕日の照返り

亀

はした錢では買ぬ生物

来

花聳と取はやすのもちとの内

見

火燧ふさは猫も恋せず

雀

佛壇も彼岸七日は寺の真似

静

あたまに星の光る朝起

亀 (9・ウ)

島にもならぬ石地に骨折て

来

託宣聞はこはい産神

見

負た子は見るとの物買ばかり

雀

日傘の紋で知れる与力衆

静

松に残る月も小くらき門構

亀

仕着せの當の違ふ藪入

来

傍輩の内にかうろき轡むし

静

半日降は日和かたまる

見 (10・オ)

生垣に結び込花の片折戸

雀

巢たつ燕も其国の恩

筆

短哥行

雲裡房か杖を休めたる其麦亭に行逢て

五条坊

その笠もけふ卯の花の雪間哉

雲裡房 (10・ウ)

新茶によるも彼帛衣連

反喬舎

戸をたゝく隣の朝寝そしられて

其麦

あ房くゝと烏啼ゆく

裡

十六夜の闇はうそかと思ふほと

ウ

人待橋に風冷るなり

条

身のうさを隠しかねたる袖の露

麦

三荷つゝ、苧柴も小腕

喬

雲よりも上の八峠七曲り

条

かゝる日和も観音の慈悲

裡 (11・オ)

御馳走のひとつに華も散かゝり

喬

露路から通ふ蝶も尻輕

麦

衣張も夏を隣に色みせて

裡

娶入はくれも物このみから

条

あのやうな瘡は京か葉なり

麦

異見云々燈す看經

喬

今の間に師走の来るは箭のことし

条

車の音にから風の音

裡 (11・ウ)

人心江戸は月見もさはかしく

喬

所化も鰐に化す新蕎麦

全

出代も美しいから見しられて

裡

直こきりもせず隠し買物

条

快い空から華にさそひ神

麦

ちかい中つむ狗杞の八重垣

喬 (12・オ)

五吟百員

身内から聲を出したる鶉かな

五条房

晩稻にのこる迄の秋風

野有

十三夜の後には月見る慾たえて

反喬

催ふた旅を仕そこなひけり

米布

今にまた子共くゝと親こゝろ

菊亀

端居にさます湯あかりの肌

坊 (12・ウ)



隣から直に狂哥を讀返し

布

蓋をとるなと重の占ひ

龜

角の出ぬ日さへ姑をこはかりて

坊

夕薬師とて月はあれとも

有 (16・オ)

賣買になれば蒲(葡) 葡もいやしまれ喬

布

忍ふむかしを露も時雨る、

龜

つゝれ着る膝にも琵琶を捨かねて

坊

使も腹を立はもつとも

有

葺替の屋根からこみを掃おろし

布

宮てうたふはこちの庭鳥

喬

懈怠にも諡さけて居る寺子共

布

給の中に早いかたひら

龜 (16・ウ)

大佛で少い花見のかきつはた

坊

伯父と一座の日は下戸に成

有

浄瑠璃のこはり謡に出たかりて

喬

それは柴舟これは淀舟

布

明残る月を千鳥の啼へらし

龜

何喰すとも先たは粉の火

坊

花の雪佐野屋と申茶屋もあり

有

都の春は銀のたね蒔

喬 (17・オ)

落たらは土産にほしい鳳巾

布

あ房／＼ておれか名は済

龜

旦那殿はよけれと山の神とのか

坊

これを芝居に仕たら當らふ

有

口てこそいへ百両の小判なり

喬

住持の知恵もたらぬ調葉

布

ウ

日の脚も昼に過たる時計草

龜

たま／＼虫の何としてかな

坊 (17・ウ)

手習の君は涙の癖に成り

有

稲妻のする度に物おぢ

喬

月影もすはり兼たる浪の疇

布

御祭はいつも此寒さなり

龜

其用はこちへ請取挾箱

坊

椽から抱てのせる乗がけ

有

行灯の鞘もしらりと明はなれ

喬

相手仕事の帳に十露盤

布 (18・オ)

山出しの男なからも才覚な

龜

伯母御も家うち来て産の伽

坊

北口かなふてふすほる臺所

有

居座足て見る遠里の花

喬

鷺も蓑干せは田打も肩休め

有

三月尽の空おしむなり

龜 (18・ウ)

夕顔宿賛

瓢箪の花や源氏も浮こゝろ

反喬舎巴雀

むかし忍ふ月日／＼や文帟帳

全

朝貌の一夜はななき誉かな

五条坊三逕

手はしめに鬼灯そめて竜田姫

全 (19・オ)

何某三至雅士の許を尋て白花老翁の閑居に遊ぶ

師走にも花の興ありかとの梅

楓京

庵の窓に雪の白妙

三至

蕎麦切のふとんの酒に目か覚て

白淫

其二

山茶花の匂ひや窓の朝日請  
隣ももたす垣の冬かれ

里友(19・ウ)  
三至

其三

梅か香や筆取かねし雪の窓  
もてなしも斯ふ瘦た炭の火

弘齋吟花  
三至

更衣 途中吟

つはなから綿ぬきそめて袷かな

不之庵

明ぬとて又寝もならずほとゝきす

全(20・オ)

濱名

納豆はいまはまなの豆はたけ

五条坊木児

秋葉山

莊嚴もなを折からの秋葉山

全

狂哥

五条房に四丈七尺たらねとも三尺坊の名こそ高けれ 全

山中二泊テ(20・ウ)

祖翁のむかしもかゝる時ならん夜着ひとつ祈り出給へりし祈るに

甲斐も長き夜に我か俳行の拙きをうらむ

鹿とともに泣あかしたる丸寝哉

全

行者越

這かねる我や笑はん蔦かつら

全

鳳来寺(21・オ)

岑はいま皆くれなるの夕薬師

全

狂哥

鳳来寺若衆は実せいたかのやろは薬師のきらい物とて 全

瀧川

つるくと秋のいそきや手繰ふね 全(21・ウ)

方問舎楓京『豐藻塩草』翻刻(1)

花にたゝすみ月に嘯きて吟腸をあからせたる歩き神も今朝は草扉  
の齒朶に初空を愛して

目にさわる山の端もなし初日影 夜話亭白尼

風雅は十論古今抄の糸筋をつたひて虚実の間に世上の是非を楽し  
みなから朝夕の工夫は猶算盤のうへに疎し

巻はつる年の傳授や古暦 全(22・オ)

十二支ほ句 木児

野分よりとしの旦そおかしけれ

手まぐらの楽をしれとや涅槃像

是からは寒い風なしもゝの花

うたかふた後に二聲ほとゝきす

あやめふく日はいすれにや不破の関 (22・ウ)

土産にとおもふ慾なし蓮の花

恋に橋のはしめや星の渡りより

名月や寝もせて竹の雪けしき

富貴さよいま世の菊は牡丹より

お留主ともおほえぬ神の廐かな

梅はやし跡の月のはいすれ咲

突へらす杖にこそしれ年の坂

右十二章 五条坊か句あり

不之庵か句あり 木児書 (23・オ)

猫説 玄二堂

猫牡丹の花下に眠るそのこゝろ舞蝶にありと小人の喩にひかれて君  
子にさみせらるさはよし春も漸長閑なる日影に垣根の草もえ出る頃  
恋すてふ五品皿の匂を忘れて雨露にしはたれ所さためす(23・ウ)  
まとひ歩き娘の竿に追はるゝも心にくしされと一乞調はり上たる

(五一)





煙草説 作者不知

夜道の旅のねふたき連腰に茶瓶も提られず秋の寢覺の淋しきとて  
 柵の餅に手も届かねは只此たはこの友と成社琴詩酒の三つにも増る  
 へけれ燐の燃杭を捜かしたるは幸予か昼寝の目覺しにて行燈に首延  
 したる小侍従か待宵ならん(28・ウ) 達磨は九年の壁に向ひて炭団  
 の重寶を悟り西行は柳陰にしはし火打の光りを樂しむされは出女の  
 長きせるは夕暮の柱にもたれて口紅兀さしと吸たる少は心つかひす  
 らんを船頭の短きせるは舳先に匍匐<sup>うづは</sup>て有明の月を詠ながら大海へ吸  
 から投たるよいか心の晴やかならんやことなき座敷に(29・オ)  
 緋子張のたは粉盆をあたま数に引わたしたるより路次の待合に吸口  
 包たるはにくからぬ風流なれどさすかに辞義合に手間も取へし只木  
 からしの松陰に駕たて、鎚きせる取廻せは茶屋の噺<sup>わ</sup>の差心得て匏か  
 らに薬火を盛りてさし出たる一瓠千金のたとへも此時をいふにや又  
 は雲雀啼(29・ウ) 空のとりに行先の渡場問ながら畑打のきせるに  
 雁首さし合せて一ふく吸付たる心杜漂母か飯の情よりも嬉しさは増  
 らめそもたは粉の徳も昔より人のかそへ古して今更いふもくどけれ  
 は彼愛蓮にならひて只此る品定メせむに酒は富貴成物也茶は隱逸成  
 ものなりたは粉はさしつめ君子の(30・オ) 番に當りて用る時は一  
 座に雲を起ししりそく時は袖の内に隠る爰に神龍の働ありとも思ふ  
 へし下戸と妖物をなき物のたとへにいへと誠はけ物世にすたれて下  
 戸はなを少からす今や稀なるはたは粉きらひにして野にも吸山にも  
 吸へはたは粉入の風流日々にさかにきせるのもの好年々新うして  
 若輩の目を(30・ウ) 迷はせ共楠か千柴屋の壁書を見て思ふにたは  
 粉ははさかぬを詮としきせるはよく通り灰吹はころはぬを最上と社  
 さらは色見へてうつろふ花の人心にも畢竟その物の本情実儀を失は  
 されとなり海士のたく藻塩ならねと煙り草人の立居のしほとこそな

れ(31・オ)

孟春廿八日會

首尾 煉兮堂

鶯も一夜はせめて木下陰

月も朧もさそ南うけ

ひかたから春の寒さを吹かへて

簀に洗ヒ物も相合ヒ

道草か子共使のはてぬ事

鐘は鳴ねと雨のうそく

寝にあかる畑の鳳もさそひつれ

とちへも済ぬ公事に辻占

頭巾着て長い髯まきからし

仲人の橋をかける馬買

隣へもぬけ道ありて花こゝろ

遊びも垣にあまる山吹

如月朔日會

短哥行 阿當亭

待受も若葉に長し活大根

心の笠も脱にきさらき

情なく家を此季は出かはりて

器用は生つきの小細工

月も今たからの市をさし覗キ

夜寒の声も松のあるから

下戸なから爰は一つとにこり酒

こゝろに髭はない庄司殿

普請場のゆるさに物のうせたかり

丁牧

五竹坊

貞旭

五雪

節溪(31・ウ)

竹夜

昨飛

牧

坊

旭

雪

飛(32・オ)

阿當

五竹坊

化光

貞旭

白里(32・ウ)

友左

桂呈

昨飛

支柴

汲に行のも遠い川水

翠帳

花の降曇りにけふもたらかされ

坊

談儀の鉦の彼岸過ても

五雪

二

よ所よりは病気に畑も打おくれ

旭(33・オ)

無沙汰に顔の出ぬ集め事

當

かけ取も茶漬と聞て痛ミ入

左

むかし作りに庫裡も廣過

光

化たかる狸に毘の待ほうけ

飛

女房の手の徳利いたく

里

荒々し野分も月を残し行

帳

片濱あける鵲の高聲

呈

名残

秋寒き石の鳥井の白過て

當(33・ウ)

下りて戻せは駕籠も仕合

柴

詰袖もまた藪入の花こゝろ

雪

隔ぬ中を鳥も囀り

旭

二日

哥仙一折 支柴亭

水鉢にさめてや庭の木の芽まで

五竹坊

鳥もひなたをくはる囀り

支柴

追従の箔も雛から置そめて

貞旭(34・オ)

酒も一つは今のこし元

昨飛

番のある門の出入の物とかめ

阿當

暮か近いととほす行灯

五雪

ウ

笠めして御座らは月も降用意

徳呈

相撲の異見も弱い女房

坊

さひたれと囃ふた鮎に酢も買ふて

柴

かふ隠れたも御恩てはある

旭

蒸やうな空も松から吹さまし

飛(34・ウ)

神輿通して仕舞ふ水茶屋

當

提て居る物を手拭にくるくると

雪

怪気の跡のつかぬよそ言

呈

お命講の夜は荒るのも有かたい

坊

見うしなふ子に行あい橋

柴

花の頃出て燕もうかれつれ

旭

とちら向ても春は珍重

飛(35・オ)

けふは桑府のかたへ渡らんとするに風の模様も如何なれはと反喬

亭の主になねかれて

先嬉し晴ある宿に松の花

五竹坊

鳥さへいまたなれぬ囀り

白里

出代も名替の耳に風吹て

阿當

絹もきれくよせて板張り

支柴(35・ウ)

かり垣に新地は降見通され

昨飛

何ねかふても甘い御奉公

徳呈

雲間から隠れた月も完尔くくと

亭旭

稲のそよきにはこふ餅の香

五雪

ひぬ

楓京雅兄は此道の功者なれば長途の草臥もわすれて夜終談笑に遊

菊の香に蝶も眠りをさましけり

都西(36・オ)

生雪中笋引

むかし孟宗は孝心天に感して雪中に笋を得たりとそことし初春の雪や、降かゝる頃わか後園にあやしくも一本の笋生しきさらきの半皮脱き生ひ延て弥生のはしめ頃(36・ウ)うるはしき若竹となれり

さはよしわれに老父母ありて朝夕不孝の罪はかさぬれとも孝心の行  
ヒいさゝかなしされはその感あるへき筈こそなければ思ふに此筈は門  
違に生へたるなるへし連も取違ふへくは郭巨か黄金の釜にしもあら  
ばとうらなき友に(37・オ)案内して笑ふ

いさ打人何ほり出すも畑の中 玄二堂

### 顯孝竹記

其由姓成田居于養父家世業農少有操行好學不怠雖富不驕二親在堂  
常以孝(37・ウ)聞故婢屬鄉黨相慕宗事去季宝曆壬申十一月園之竹  
偶生筍一莖而能堪霜雪到于春月枝葉繁茂人僉謂孝心之所感也由為人  
滑稽也曰天夫以我為孟宗乎我之父母老無齒豈欲筍羹者乎生来只愛金  
願天令我為郭巨而賜黄金一釜則不亦快乎聞者(38・オ)笑耳予曰不  
然維天賜汝此竹顯汝之孝心也必矣想夫子已無欲埋子之憂却有養親而  
有餘之慶也有季于茲比彼一釜金者豈不多乎哉唯知足于此竹長戴於天  
之賜句剪句伐名曰顯孝竹云爾 宝曆癸酉春三月 老衲淨山艸(38・  
ウ)

試筆 武州鴻巣 柳机

佐保姫の繪の間見せしと神霞  
市中を行としのあはたゝしさもかへつてひとつの趣向となるはこ  
の道の話計ならむ

年の瀬にはねおる金魚銀魚かな 全(39・オ)

雨尾山興行

### 探題

消たその跡から涌て雲のみね 桃文  
村雨や戻りは直に日傘 桃野  
沢潟や障子明れば青畳み 亀鏡  
蔦の葉の真似はせねともさゝけ哉 里友

方問舎楓京『豐藻塩草』翻刻(1)

精進の日もさがりけり沖鱸 柳懸  
朝寝する人に昼顔咲にけり 鹿木(39・ウ)  
川狩や御手おろさるゝ股の蛭 節雀  
身を捨て骨の晴する糸瓜哉 楓京  
瓢箪や駒は見て居る垣の花 白淫  
凌霄や藤の曇も有ものを 其由

### 良夜

十分は露こほしけりけふの月 反喬舎(40・オ)  
今までする恵方庵は三州の驛路にして車馬の通ひもさはかしけ  
れは近キ頃そのうら町へ居をうつしけるかこよひ猶旧草のあたりへ  
まねかれて

芋をやく馬糞も市の月見哉 反喬舎(40・ウ)

けふは風雅の道を尋んと巴雀子の許にあそひて

小春にも山の笑ひの候歟 信州平谷 三夕

我は老木の物わすれ花 巴雀

脇息によしと机をねち向て 菊亀

華やかで元日の夜こそ淋しけれ 木兎(41・オ)

不破の月見んと蓼然園にもよほされて

駕籠かりて昼寝て行ん月の旅 五条坊

美濃なれば合羽はいらし月の旅 可静

枇杷橋上より名古屋を見かへりて

鱸のこかねにふれて秋日和 全

芦の穂の白さもいまたさらし白 坊(41・ウ)

### 起夜泊

待宵や日高に着ておこし宿 静  
夕暮の空かき曇りてこよひは月もおほつかなし

待かとの文もと、けす雁の声

坊

さわたり川

さわたりや早くも来たる鴨の声

全

関ヶ原の客舎孫八に案内させて古戦場を見ありきけるに草の花々  
(42・オ)さま／＼なるまんしゆさけの名さへ異なるに死人華とは  
聞もうるさし

其ちまた今も真赤な草の華

坊

首塚

この下にいかに聞らん轡むし

静

不破関

板ひさしあれたる後の秋風も今はむかしの (42・ウ) 普請に大関  
の名のみ残りて軒もる月の淋しさもなく農商の家に栄ふるも実君か  
代のしるし成へし

関守も酒屋になりて月見かな

坊

関屋にもとめす更行けふの月

静

物見松

松凄し今色鳥はわたれとも

全

朝長の墓所のかたほとりにわらはへの (43・オ) 栗をおとし居た  
れは

奪あふて膝あやまつな栗の毬

坊

本田川の名は俗ならか糸ぬき川とはいとやさし

萩すゝき糸よる川のあつちこち

全

鵜沼のわたし

瀬の音もすこしほそりて十六夜

静

いさよひや我もちくとは旅やつれ

坊

車宇亭に草臥をやすむ (43・ウ)

立待や笠は脱とも旅こゝろ

静

おもはすも十阿子に尋られて廿年来の昔を語るに田家淋しくして  
そのもてなすへきものなし

あれを見て腹ふくらかせ稲の花

其由

生綿の蝶のみな遊び連

十阿 (44・オ)

月のさす時は窓まで誉らせて

阿

金は持たいものでこそあれ

由

京の水のんて痞もさつはりと

、

自分に膳をもつて相伴

阿

負てやる碁も手違の気はたらき

、

きのふもけふも扱もさみたれ

由

逗留も板一枚の舟のうへ

、

萩のお城の大鞍聞ゆる

阿 (44・ウ)

火を灯す老に夜なへの糸車

、

後家て四十の春も過行

由

下向する彼岸の笠を疑はれ

、

風呂におくれて遣ふ洗足

阿

何事の荒かもしらす風か吹

、

鳥居は山を飛退てゐる

由

背負出す薪は市へ急くやら

、

門の掃除も老の朝起

阿 (45・オ)

冴残るそれさへ寒き月の霜

阿

雀の群の笹にこほる、

由

名残  
看経も祇王の戻り待合

阿

今夜は是て油有ふか

、

はれ曇る花の日和はこんなもの

由

あかる雲雀に天井はなし

廿年来その名を知たる十阿子に尋られて (45・ウ)

敲かれて明ちからあり月の門

楓京

ちち、と宿を乞ふ稲すゝめ

十阿

嶋の神社は近代邑中より遷座とかや

神こゝろ爰にをけとや扇嶋

十阿 (46・オ)

雑禮誹諧六国言葉ナマリ入

武州

梅咲や梟も頭巾おきにしろ

君の為にはせじやの若菜葉を

朋輩もおいらが中は雪とけて

駿州

行鷹よ初の字つけて秋来やろ

このがいな日に芦は角くむ

(46・ウ)

祖父は山ばんばアは水ぬるませて

遠州

卯の花やいつそいちがひ雪の垣

山ほとゝきすものほとゝきす

渡しからすんに二里の道暮て

三州

へい秋に鳴海しほりや草の色

はげむ踊の月に専ら

(47・オ)

おかいみしよ時に扇も隙あきて

尾州

槇に雨預けてりうと月夜かな

梅も紅葉に後のおそない

方問舎楓京『豊藻塩草』翻刻 (1)

一貫に館の秋を出かわりて

京都

枯れた中に何んじやへ花の冬牡丹

さいな霜夜に下屋鋪守り

(47・ウ)

いんで来る留主は狸に鍋あれて

錆て根へからぬけぬ一腰

三ヶ月の瘦も土用かしんどいか

臍にあじいな松のほしさよ

宮寺歳暮

春を刻む宵賑はしや臺所 白臥

(48・オ)

むかしみの、片ほとりに住ては常に閑癖の心ありて爰も浮世成け

りはやく寺をも離れて思ひし俣の山里にも臥はやと岐山の何尾主に

一字を得て自ラ白臥とは称せしかはからすもありかたき嘉恵を蒙り

て罪を尊寿の室に請ては御宮の公事末山の雑務朝夕の事繁にむかし

白臥の閑なりしも今はた白起と起あかりて理屈に理屈をかさねたれ

はあら面白の (48・ウ) 我身なりけり世上に七名の案し方あれば人

前に八鉢の附方ありて何をか意必固我ならんさるにや其日その時の

変に應してそれも面白くこれもおもしろくなら面白の春の気色成け

り

裳白の又おもて白や明の春 白起

(49・オ)

(続く)

(付記) 資料の閲覧、及び翻刻の許可を下さった愛知県立大学附属図書館に感謝致します。また、本稿を為すに当っては、鈴木勝忠氏に御教示頂きました。併せてお礼申し上げます。尚、本稿は名古屋女子大学教育研究所、平成二年度の一般研究助成の成果の一部である。